朗読の教科書

[著] 渡辺知明

文部科学省学習指導要領準拠

朗読検定®

朗読の教科書

［著］渡辺知明

文部科学省学習指導要領準拠

朗読検定®

はじめに

●朗読を楽しむために

この本を手に取ってくださり、ありがとうございます。あなたは、きっと朗読に関心があるのだと思います。

この本にどんな期待を抱いているのでしょうか。
これから朗読を始めるので学び方のヒントをお求めなのでしょうか。
それとも、すでに朗読の勉強を始めているので上達のための参考にされるのでしょうか。

朗読とはだれもが手軽に楽しめるものです。読みたい本があって、声が出て、文字が読めれば、だれでもすぐに始められます。小学生からおとなまで幅広い世代の人たちが楽しめます。自分の好きな詩や物語や小説などを朗読することはとても楽しいことです。一度でも、そんな経験をすると、何度も繰り返し読んでみたくなるものです。

また、朗読はコトバの力をつけるための基礎訓練になります。「読み・書き、話し・聞き」というコトバ勉強の入口になります。子どもが本を読むことから始まって、おとなが話のやりとりをすることにもつながります。

さらに、音声に関わる仕事をする人たち――アナウンサー、ナレーター、俳優、声優、司会者などにとっても、音声表現の訓練となるものです。

この本は実践のための本です。理論的な話は最小限にとどめました。多くの人たちがひとりで朗読の勉強ができるように考えて書きました。日本ではこれまで、何度も朗読ブームというものが繰り返されてきました。ところが、残念ながら多くの人たちが途中でやめてしまったようです。わたしもこれまで、いろいろな人たちから、

「どうしたら朗読がうまくなりますか?」
「どんな練習をしたらいいのですか?」

などという質問を受けました。この本には、そんな質問に答えるつもりでいろいろな技術を取り入れました。どれも、「こんな方法があったのか!」と思うほど手軽な方法です。とにかく実行してみてください。必ず成果が上がります。

●朗読検定の教科書として

この本は日本朗読検定協会からの依頼をきっかけに書いたものです。朗読に必要な技術について、小学生からおとなまで、だれもが楽しみながら実践を重ねていけば進歩できる方法を紹介しています。勉強をして、実力がついてきたなと思ったら朗読検定を受検してみてください。

しかし、「朗読の検定なんてできるのか？」と疑問をいだく人もいるかもしれません。また、「朗読は評価できるものなのか？」、「朗読のよしあしなんて好みによるのじゃないか？」と思う人もいるかもしれません。

朗読とは文字に書かれた文学作品を読むものです。今、わたしたちが耳にしている朗読にはいろいろあります。初歩から上級までさまざまな段階があります。朗読の表現は奥深いものです。まだまだ表現の可能性があるかもしれません。それを精一杯のばしていったら、果たしてどこまで行くのでしょうか。人間のあらゆる行為は表現に通じます。朗読も芸術といえるひとつのジャンルに発展することでしょう。

ただし、どんな芸術にも基礎となる技術があります。高度な表現のできる人は基礎がしっかり身についています。その基礎的な面については客観的な評価が可能なのです。朗読検定では基礎的な技術を評価します。それは文章を音声化して読むための基礎技術です。文章には、ひとつひとつの文字の読み方、文の区切り方、語句の強調の仕方などが表現されています。高度な芸術的な読み方も、基礎的な技術によって支えられています。

この本には、だれもが登れる道すじが具体的に示されています。「千里の道も一歩から」といいます。みなさんも、この道を一歩ずつ登っていくことで、必ず頂上に近づくことができるのです。

●この本の読み方

どこからでも関心のあるところから読み始めてください。第1章は朗読についての総論、第2章から第5章までは、朗読の基礎的な能力をつけるための体力作りの章です。特に、第2章の発声・発音は、継続して行うべき基礎訓練です。そして、第6章と第7章は、文学作品の表現能力をつけるための章です。上級編といってもよいでしょう。ここまでくれば、さまざまな作品を自由に朗読できます。

この本には3つの部分があります。「本文」と「練習課題」と「コラム」です。本文をたどっていくと、朗読について理解できます。でも、朗読の実力をつけるためには、必ず「練習課題」を朗読しながら読んでください。見本が付録のCDに録音されています。必要に応じて耳で聴いて練習してください。そして、「本文」の内容についてもっと詳しく知りたくなったら、「コラム」も読んでください。朗読の基礎となる理論や豆知識を身につけることができます。

また、教室で教科書として使えるように、各章の終わりには復習問題もつけておきました。ひとつひとつの「練習課題」が身につくまで実行してください。

この本はひと通り読み終えればよいという本ではありません。ずっと手元において、繰り返し繰り返し読みなおすための本です。朗読の実力は、基本的な練習を繰り返すことによってつけられるものです。

しかも、楽しみながら総合的なコトバの能力を高めてくれます。
最後に、わたしを表現よみに目覚めさせてくれた師・大久保忠利の3つのスローガンをご紹介します。

実行が実力を生む！
コトバの力は生きる力
コトバは一生かかって磨くもの

もくじ

はじめに ―― 2

第1章　朗読とはなにか ―― 11

1 「読む」ことと「聞く」こと ―― 13
2 朗読を成り立たせる8つの要素 ―― 20
3 朗読には3つの段階がある――音読・朗読・表現よみ ―― 22
「読み」は大きく3つに分かれる／朗読上達のために考えること

第2章　姿勢・発声・発音 ―― 31

1 姿勢――上体のリラックスと落とし込み ―― 33
腰かけた姿勢／立った姿勢
2 声はどのようにして出るのか ―― 40
3 声を出すときの4つの働きとその練習方法 ―― 43
声を出すための息の吐き方の練習法／声を出すための「ノドの使い方」の練習法／
声を出すための「舌の使い方」の練習／声を出すための「口のかまえ」
4 5分間でできる課題集 ―― 80

第3章　リズムある朗読の仕方 ―― 85

1 日本語のリズムとアクセントについて ―― 87
共通語のアクセント／高さアクセントと強さアクセント／強さアクセントとリズム／
自由自在にアクセントをつける
2 2音3音の区切りとリズム ―― 101

3 2音3音ごとに強さアクセントをつける ―― 110
語句レベルでの2音3音ごとのアクセントについて／文のレベルでの2音3音のアクセントについて
4 フレーズ作りと目玉アクセント ―― 125
5 リズムある読み方をするための課題集 ―― 133

第4章 朗読のための文法入門 ―― 137

1 なぜ朗読に文法が必要なのか ―― 139
2 文分析入門 ―― 143
文分析と文の成分／文分析の段階
3 文の意味を明確にするイントネーションの原則 ―― 153
イントネーションの原則／文の成分の3種類／
4 文の組み立てとイントネーションの変化 ―― 159
主文素＋述文素（主要成分）／必要成分の加わった文／自由成分の加わった文
5 文分析による理解と読み深め ―― 170
文分析で想像力を鍛える／文の文法的な読解力／文分析による読み深め
6 文分析の練習課題 ―― 178

第5章 記号づけの方法とは ―― 185

1 記号づけとは ―― 187
2 記号づけの記号一覧 ―― 192
3 記号づけの方法 ―― 196
カッコでくくる記号／文の切れ目の記号／強調のための記号
4 記号づけの応用法 ―― 214
作品を理解するための準備として／仕上げよみの目標として／聞き取りの手がかりとして／作品朗読法の共有財産として
5 記号づけの課題集 ―― 218

第6章 文学作品の表現方法 ―― 225

1 文のいろいろな形 ―― 227
だれが語るのか／だれが「どうだ」と語るのか
2 描写と説明の読み方 ―― 245
描写の読み方／説明の読み方
3 文におけるプロミネンス ―― 255
基本的な語句のプロミネンス／語順によるプロミネンス／文脈から生じるプロミネンス／解釈によるプロミネンス
4 文と文とのメリハリ ―― 268
文のつながりと段落の転換／接続語による文のメリハリ
5 人物・会話・対話の表現 ―― 277
内言の表現／「会話」と「地の文」との関係／対話とプロミネンス
6 文学表現の復習課題 ―― 286

第7章 文学作品の文体と「語り口」 ―― 291

1 文学作品をどう読むか ―― 295
2 ことばの背景にあるもの ―― 300
背景感情のとらえ方／背景行為のとらえ方

3 文学作品の「語り口」 310
4 文学作品の表現よみ 320
あとがき 331
参考にした文献 336
特典音声 記載ページ対応表 338

コラム関連

重要コラム：朗読での声の表現法――アクセント・イントネーション・プロミネンス 18
コラム：コトバには4つの要素がある 29
コラム：黙読にもいろいろある 30
コラム：腹式呼吸と腹式発声 46
重要コラム：声の質とは何か 50
重要コラム：日本語の2音・3音のリズム 57
重要コラム：現代の発声法と伝統的な発声法 57
重要コラム：地声とウラ声 65
重要コラム：滑舌の訓練と早口ことば 75
重要コラム：高さアクセントと強さアクセントについて 99
重要コラム：日本語のリズムについて 99
重要コラム：アクセント記号の種類について 100
コラム：音声合成と朗読の表現 142
コラム：修体文素と修用文素のイントネーション 158
コラム：コトバを伝える「テーマ・レーマ展開」 169
重要コラム：オーラル・インタープリテーション 191
重要コラム：詩の記号づけ 212
重要コラム：文の骨組みと朗読 254
重要コラム：プロミネンスの表現方法 266
重要コラム：文学言語と理論言語 298
重要コラム：コトバの背後にあるもの 299
重要コラム：朗読を楽しむために 307
重要コラム：言語理論と朗読のつながり 319

第一章　朗読とはなにか

【本書の全体構成の解説】

1 「読む」ことと「聞く」こと

朗読とは、ひとことでいうと、文学作品などを声に出して読むことです。一般には、声に出して読むことを「音読」といいます。「音」で「読む」という意味です。初歩的なレベルから高度なレベルまですべて音読です。小さな子どもが文字を見て、一文字一文字ずつ読みあげることも「音読」です。また、じょうずな人が小説や物語をまるで眼に浮かぶように読むのも「音読」です。ですから、小学校では、低学年では「音読」、中学年から高学年へと進むにつれて「朗読」と、区別して学ぶことになっています。

この本では、おとなたちが文学作品を表現して読んでいる読み方まで広く視野にいれて「朗読」と呼ぶことにします。

●「読む」こと・「聞く」こと

「読む」ということばには広い意味があります。国語辞典で調べると、次のような８つの意味が書か

れています。（『広辞苑・第四版』）

（1）数をかぞえる。
（2）文章・詩歌・経文などを、一字ずつ声を立てて唱える。
（3）詠じる。詩歌を作る。
（4）文字・文書を見て、意味をといて行く。
（5）漢字を国語で訓ずる。訓読する。
（6）（講釈師が）講ずる。
（7）（外面にあらわれたものから）了解する。さとる。
（8）囲碁・将棋などで、先の手を考える。

「読む」ということは、ただ文字を読むことだけにとどまりません。「（4）意味をといて行く」「（6）講ずる」「（7）了解する。さとる」などの意味も含まれています。意外だと思いませんか。しかし、このような意味があるからこそ、朗読も、文学作品の内容を理解して、解釈して、声によって作品を表現する読み方に発展するのです。こう考えると、「（8）先の手を考える」こともまんざら無縁のことではなくなります。

それでは、「聞く」ことについてはどうでしょうか。「読む」と「聞く」とは対になったことばです。

朗読とは、声に出してただ読めばよいものではありません。聞き手があってはじめて成り立つものです。「聞く」というのは、朗読の効果あるいは目的と考えられます。国語辞典には「言語・声・音などに対し、聴覚器官が反応を示し活動する」こととして次の7つが挙げられています。これらの反応が聞き手に生まれるような朗読が理想なのです。（『広辞苑・第四版』）

（1）聴官に音の感覚を生ずる。声・音が耳にはいる。
（2）人の言葉をうけいれて意義を認識する。聞き知る。
（3）他人から伝え聞く。
（4）聞き入れる。従う。許す。
（5）よく聞いて処理する。
（6）注意して耳にとめる。傾聴する。
（7）（「訊く」とも書く）尋ねる。問う。

注目すべきは、「（4）聞き入れる。従う。許す」や、「（6）注意して耳にとめる。傾聴する」といった効果です。このような朗読なら聞き手に楽しんでもらえることでしょう。また、朗読を聞いたあとの「（7）尋ねる。問う」という反応にも意味がありそうです。

それでは、どうしたら、そういう朗読ができるようになるのでしょうか。そもそも読むことと表現す

ることはつながっているものです。文学作品の読み方として、感情移入という言葉があります。作品に気持ちを入れて読むという意味です。声に出して読むと、たとえ他人の言葉であっても、まるで自分が考えたり思ったりしたことのように感じられます。朗読も、ただ他人の言葉を読みあげるところにとどまらず、いつか自分の考えとして表現できるようになります。それがコトバを学ぶということの意味です。

今、みなさんは朗読に関心を持って、この本を読んでいることでしょう。だれにでも、学校の教科書を声に出して読まされたことがあると思います。しかし、楽しいとは思わなかったのではありませんか。むしろ、つらかったでしょう。ところが、学校の勉強からはなれて、自分ひとりで小説や物語を声に出して読んだときに、意外におもしろいという発見をしたのではないかと思います。

たしかに朗読は楽しいことです。自分も読んでいて楽しいし、人に聴いてもらえたらうれしくなります。そして、もっと大勢の人たちに聴いてもらいたいと思うようになります。それならば、せっかく聴いてもらうのですから、よりよい読みをしたいのは当然です。

では、朗読がうまくなるためにはどうしたらいいのでしょうか。何か良い練習方法はないのだろうか。そんなことを考えたこともあるでしょう。

これまでの朗読の教え方は、ひたすら読めばわかるというものでした。しかし、それではなかなか進歩しません。というのも、コトバについての研究の多くが、文字に書かれた言葉を解釈するためのものだったからです。朗読も音声のコトバについての理論がないままに、経験的に学ばれてきました。朗読の力をつけるためには、言語の理論に支えられた方法が必要です。これからいっしょに、その方法を考えながら学んでゆきましょう。

注・この本では、「コトバ・言葉・ことば」という3つの表記を次のような原則で使い分けています。

①「コトバ」とは、言語そのものと、言語活動のすべてを意味しています。例えば、「話し・聞き」、「読み・書き」などの言語活動と、そこに参加している言語のすべてです。

例　朗読を勉強するとコトバの力がつきます。

②「言葉」は、おもに単語として取りあげられる言語のことです。多くの場合、辞書や本に文字として記された言語を意味しています。

例　日本語には、美しい言葉がいろいろあります。

③「ことば」は、人が実際に言語を使っている過程のことです。声に出して本を読んだり、だれかと話しをしたり、あるいは、考えながら文章を書くような行為のことです。

例　朗読されたことばは美しく響きます。

【重要コラム】朗読での声の表現法――アクセント・イントネーション・プロミネンス

朗読の目標は声による作品の表現です。文字を読みあげて聞き手に伝達するものではありません。表現の本質はいずれかの部分を強調することにあります。それは強さや高さによる声の変化で表現されます。そのポイントは3つあります。

①アクセント　（音節の強調）
②イントネーション（語句の強調）
③プロミネンス　（語句・文全体の強調）

①アクセントとは、特定のひとつの音節を強めることです。その音を強くしたり高くすることによって語句や文の意味が明確になります。文のアクセントは、2音ないし3音の区切りごとにひとつあります。それが日本語のリズムを生み出します。日本語のアクセント辞典では、単語のアクセントを高低の変化でとらえて表示しています。

②イントネーションとは、文の中のいずれかの語句を強めることです。文末の声の上げ下げと、文全体の「抑揚（よくよう）」です。あらゆる文に原則的なイントネーションがあります。それは強さや高さの変化で表現されます。文章を読みあげる場合には、イントネーションは平坦になりがちです。しかし、作品の内容をとらえて表現する場合には、読み出しが強調され、後ろに行くにつれて収まるくさび形のイントネーションになります。

③プロミネンスとは、特定の語句や文を通常以上に強めるための表現です。プロミネンスされるべき語句は、独立したそれぞれの文の中にもありますし、文と文とのつながりからも生まれます。プロミネンスには、2種類あります。ひとつは、文と文脈とを正確に読み取ることによる原則的なもの、もうひとつは、読み手の作品理解と解釈とから生まれるものです。

2 朗読を成り立たせる8つの要素

朗読というと、みなさんはどんなことを想像しますか。おそらく、読み手が聞き手の前で詩や小説や物語などを声に出して読む姿を思い浮かべることでしょう。そこにはいろいろと考えるべき要素があります。まず、朗読というものはどのような要素から成り立つものなのか考えてみましょう。そのひとつひとつを学ぶことによって朗読の力がつくのです。

朗読が成り立つためには8つの要素があります。ダイ・ドドナ・ドドナ（ダレガ・イツ・ドコデ・ドンナ・ナニヲ・ドウ・ドウスル・ナゼ）の質問項目を手がかりにして次のことを考えてみましょう。

①だれが読むのか
②だれに読むのか
③何を読むのか
④何を使って読むのか
⑤何のために読むのか
⑥どのように読むのか
⑦いつ読むのか
⑧どこで読むのか

国語辞典には朗読について次のように書かれています。

「〔鑑賞・紹介などのために〕文学や手紙などを、皆に分かるように音読すること」『新明解国語辞典』

「声高く読み上げること。特に、読み方を工夫して趣あるように読むこと」『広辞苑』

次節からは、国語辞典の定義にしたがって、ひとつずつ考えてみましょう。

3 朗読には3つの段階がある——音読・朗読・表現よみ

1 「読み」は大きく3つに分かれる

朗読については、一般的に、声に出して読むことすべてのように思われています。たとえば、音読、音声訳（あるいは音訳）、語り、読み聞かせなどのほかに、アナウンスやナレーションまで朗読とされることもあります。ときには、裁判官が判決文を読み上げることも朗読と呼ばれています。しかし、もう少し限定しておく必要があります。朗読の基本的な条件は、以下の４つです。

①読み手が　→　②聞き手に　→　③物語や小説などを　→　④音声で読むこと

そして、朗読には発展の段階があります。音読—朗読—表現よみ、という3段階です。ここでは「語り」の系列は外します。テキストを持たずに行われるものだからです。この3段階を明確にすることは、みなさんが朗読の技術を磨くための目標になります。

それでは、この3段階について順に説明しましょう。

第一に、「音読」はもっとも広い意味をもちます。要するに、声に出して読むことはすべて音読なのです。読むときに声を出すか出さないかという区分です。声を出さないのは黙読、声を出すのが音読です。学校教育では初歩の朗読を音読と呼んでいます。テキストに書かれた文字を読み上げるようなレベルの読みは音読というしかありません。

第二に、「朗読」は音読の一種ではありますが、厳密には前に見た定義で「読み方を工夫して」といわれるような表現を意識したものになります。学校教育では音読よりも高度なものを朗読と呼んでいます。文の基礎的な読み方にとどまらず感情表現なども含まれます。

第三に、文章を読むことから脱して作品を表現する段階が「表現よみ」です。中学生以上の人たちが目指すべき読み方です。文章を読む読み手の読みを聞くのではなく、作品の世界そのものを楽しめる読みです。とはいっても、まったくちがった分野の読み方ではありません。朗読の基礎から訓練を積んでいくことによって到達することが可能な段階です。

2　朗読上達のために考えること

①「読み手」に必要なもの――読み手の身体能力

朗読する人は「読み手」、聞く人は「聞き手」です。読み手には、どんな能力が必要でしょうか。最低限必要なものを考えてみましょう。

まず、声が出ること、文字が読めることです。そして、耳が聞こえることです。目よりも耳が大事です。読み手は自分の読みを聞きながら読むからです。たとえ原稿がなくても、朗読はできます。例えば、同時通訳の人たちが訓練しているシャドウイングという方法があります。それは、今、耳で聴き取ったことばのあとを追うようにしてつぶやいていく訓練法です。つまり、耳から聞いた声をもう一度、自分で追いかけて朗読すればよいのです。

②「聞き手」への配慮――「聞き手」の役割

朗読にとっては、読み手と聞き手とが必要です。ただし、読むことはひとりでもできます。練習をするときには、たいていひとりでするものです。聞き手はいません。

しかし、「読み手」は「聞き手」を意識するものです。それは、どのような聞き手なのでしょうか。人前で読むときには、聞き手がいます。しかし、聞くことを聞き手だけに任してはいけません。自分の声も聞かなければなりません。

狂言のことばに「耳で読み、口で聴く」という教訓があります。これは読むことと聞くことの本質を語っています。読みながらその声を自分の耳で聞くようにし、人の読みを聞くときに自分の口も動かすつもりになるのです。朗読でも同じです。

③何を読んだらいいのか――本の選び方

それでは、朗読では何を読むのでしょうか。もちろん、文字で書かれた文章や本です。どんな文章でも声に出して音読することはできます。しかし、朗読では読むべき文章を選ぶ必要があります。読むべきものは、情報の伝達を目的にした論文や新聞などの報道文ではありません。なぜなら、朗読とは、文学作品を表現したり、味わったりすることだからです。

結論を言えば、文学作品を読むことが原則です。例えば、詩や小説、物語などです。これらの文章の特徴は、何らかの意味で感情が込められていることです。それに対して、論文、説明文、解説文、報道文などは、感情の表現よりも論理的な内容が問題になります。さらに、文学文であっても、朗読に適している作品を選ぶという課題もあります。文章もすばらしいし、内容もすばらしいという作品が理想です。朗読では特に、ことばの響きの美しさが問われるからです。

④何を使って読むのか――声とからだのトレーニング

朗読の手段は声です。それも、からだ全体を使って発せられる声です。声は口先だけで出すものでは

ありません。からだ全体を使うことによって豊かな声の表現ができます。要するに、発声と発音との身体能力が必要なのです。

また、文字のことばを瞬時に理解して、音声のことばに変換する能力も必要です。それは、一文字一文字をそのまま音声に置き換えるだけではありません。文字として書かれた文章を分析して理解すると同時に声に表現する総合的な能力です。文字と音声とが必ずしも対応していないところにむずかしさがあります。ですから、特別な訓練が必要なのです。

⑤何のために読むのか——朗読から得られるもの

朗読は何のためにするものなのでしょうか。国語辞典には、「鑑賞、紹介など」のためと書かれています。また、「読み方を工夫して」ということからも目的が考えられます。それはいったいだれのためにするのでしょうか。だれが「鑑賞し、味わう」のでしょうか。読み手のためでしょうか、聞き手のためでしょうか。実は、そのどちらにとっても意義があります。読み手は作品を声に出すことによって作品を理解し、聞き手は、その声を聞くことで「鑑賞」できるのです。つまり、読み手の味わいが同時に聞き手の味わいになるのです。

朗読の訓練をした人には声の表現力が身についてきます。わたしの周辺でも、「話をするのが楽になった」とか、「言いたいことがすぐに口から出るようになった」という喜びの声を聞きます。さらに、「気持ちに自信がついてきた」とか、「ひと声で自分の話に注目してもらえるようになった」とか、「黙ったままものごとを考えられるようになった」とか、「文章が書けるようになった」という声も聞きます。つまり、コトバの力がついたのです。コトバは人がものを考える手段として最も重要なものです。朗読は「話し・聞き、読み・書き」というすべての分野のコトバの力を高めてくれるのです。

⑥どのように読むのか——朗読をどのように学ぶのか

朗読とは、一文字一文字を声に置き換えることでもないですし、単なる文章の読み上げでもありません。また、ことばと関係なく読み手の感情を示すものでもありません。

ことばには意味があります。ことばの意味を示すことが表現ですから、何らかの工夫が必要になります。それが国語辞典に書かれる「読み方を工夫して」という意味です。作品の世界が生き生きと表現された朗読というものは聞いていて楽しいものです。

では、どのようにしたらそのような表現ができるのでしょうか。また、そのような表現力はどのようにしたら身につくのでしょうか。それが朗読理論で考えるべき課題です。この本はそれを解きあかすために書かれています。この本全体で明らかにしたいと思います。

「⑦いつ」「⑧どこ」で読むのか——発表の楽しみと人との交流

朗読をするため、つまり作品を読んで聞いてもらうためには、トキとトコロとが必要です。さまざまな場合が考えられます。また、読み手と聞き手とは、どのように向き合うのでしょうか。読み手と聞き

手との双方について考えるべき問題があります。

読み手にとっては、朗読の長さはどのくらいがよいのか、会場の広さはどのくらいがよいのか、どんなときにマイクを使うのか、ナマの声とマイクの声とでは読み方をどう変えるのかなどが考えられます。また、聞き手にとっても、どんな態度で聞いたらよいのか、朗読のどこに注意して聞いたらよいのかなど、いろいろな問題があります。

第二次大戦中のヨーロッパの話として、こんなエピソードを聞いたことがあります。人びとが防空壕に避難しました。真っ暗な中で人びとは恐怖に襲われて不安になっています。そんなとき、だれかがみんなに詩を暗唱して聞かせました。それが大きな慰めになったというのです。

朗読のイベントには特別の道具は要りません。ちょっとした場所があれば、いつでも簡単に朗読会を開くことができます。読むべき本がなくても暗記していれば人に聞いてもらうことができます。大げさな音響装置も照明も要りません。生活のなかでの小さな楽しみとしてもっともっと開催されるとよいと思います。それは小さな芸術発表会です。しかも、だれもがすぐに参加できてお互いが楽しめるものです。さらに、各地にある文学館や美術館などを会場にして朗読会が開催されるようになればすばらしいことです。総合的な文化交流の場となることでしょう。

以上、朗読についての基本的な問題に触れました。まだまだほかにもいろいろな問題がありますが、それについては今後のお話のなかで取り上げることにしましょう。

（コラム）　コトバには4つの要素がある

言語には、①発音（音韻）、②語イ、③文法、④文字、の4つの要素があります。これはあらゆる国の言語において共通です。

①は、ことばを形づくる音です。ひとりひとりの発音には微妙なちがいがありますが、共通したものがあります。それが音韻です。日本語ではひらがなとカタカナで表示されます。

②は音のつながりによってできる単語です。英語で言うならボキャブラリーです。

③は、語句がどのように組み立てられて文になるかということばの組み立て方のきまりです。

④は、コトバを表示し記録するためのものです。日本語の文字には、ひらがな、カタカナ、漢字などがあります。

朗読を考えるときには、これらの要素のちがいをアタマにおいて練習します。特に注意することは、文字と発音とのズレです。文字がそのまま発音を表しているとは限りません。いつまでも文字を読みあげていては進歩しません。文字を声のコトバに転換する能力を高めましょう。

（コラム） 黙読にもいろいろある

声に出して読むことを音読といい、声に出さずに読むことは黙読といいます。ひとくちに黙読といってもそのやり方は次のように3通りあります。①音読み、②目読み、③拾い読みです。

①「音読み」とは、文字を見ながらアタマのなかに文字の音を思い浮かべる読み方です。音読をするのと同じだけ時間がかかります。しかし、音読と同じくらいの読みの訓練ができます。

②「目読み」とは、文字のひとつひとつや語句のまとまりを目で見て、直接に意味を理解する読み方です。一般に行われている黙読がこのやり方です。

③「拾い読み」とは、本の字づらに目を走らせながら、絵や写真を見るように文の意味を読み取る方法です。ポイントになる語句だけを拾っていくわけです。速読はこの読み方です。

【第２章の構成】

～本章のねらい～
良い声を出すにはからだの動きが重要なことを学ぶ

～本章の流れ～

良い声は口先の動きだけで出るものではない。
からだ全体の動きが必要

↓ そのためには

安定した姿勢（腰かけた姿勢＆立った姿勢）が必要

↓ さらに

声が４つのはたらきによって出ることを知るのも必要

↓ 練習次第で良い声が出せる

良い声を出すための練習の方法は４種類

- **息を吐く練習（３種類）**
- **ノドの使い方の練習（５種類）**
- **舌の使い方の練習（４種類）**
- **口の構え方の練習（１種類）**

【第３章の構成】

～本章のねらい～
作品を感情豊かに表現するには
区切りとアクセントによるリズムが必要

～本章の流れ～
最終的な目標である「読みにリズムを生みだす」ためには

↓

フレーズを作って、目玉アクセントをつける必要がある

↓ そのためには

以下の手順を踏む必要がある

↓

大前提　　：アクセントについて知る

ステップ１：文章を２音３音のリズムに区切ってみる

ステップ２：２音３音ごとに強さアクセントをつけてみる

ステップ３：フレーズを作って、目玉アクセントをつける

【第４章の構成】

～本章のねらい～
文章の意味を伝えるためには、
読み手の文の理解が必要

～本章の流れ～

文を理解するには文法を学ぶ必要がある

↓

文法を学ぶにあたっては
文分析と文の成分を知識として知っておく必要がある

↓ さらに

文の構造を自分で分析できるようにしておく必要もある

↓ 文章を読むということは
つまり……

文字レベルで分析した文の構造を音声化することであり、
このときに重要なのがイントネーションである

↓ 文の構造を音声化するには

イントネーションについて知る必要がある

１）イントネーションの原則とは

２）実際の読みでは「どの文要素」を強めるのか

文分析ができると読解力も深まる

【第５章の構成】

～本章のねらい～

作品構造（語りや会話など）と文章の構造（間と強調）を読みとるために記号づけをする

～本章の流れ～

記号づけとは＝作品を音声化するための分析である

↓ さらに

記号の種類は３分野１０種類であることを知る

１）カッコの記号（３種類）
２）切れ目の記号（４種類）
３）プロミネンスの記号（３種類）

↓ 同時に

記号づけの方法（各種記号の付け方）を知る

１）カッコでくくる記号（カギ、カッコ、山カッコ）の付け方
２）文の切れ目の記号（区切り、間、切りかえ、ツナギ）の付け方
３）プロミネンスの記号（アクセント、波線、二重線）の付け方

↓ 最後に

記号づけの応用法を知る

１）作品理解の準備として
２）仕上げ読みの目標として
３）聞き取りの手がかりとして
４）作品朗読法の共有財産として

【第６章の構成】

～本章のねらい～
作品の世界を楽しんでもらえるような読みにする

～本章の流れ～
本章のねらいである「作品の世界を楽しんでもらう」ためには
文章を音声化して、
かつ作品に合った表現の方法を学ぶ必要がある

表現の方法としては５つ

- **「語り」の表現の仕方（文のかたち）**
- **描写と説明の表現の仕方**
- **プロミネンス（強調）の表現の仕方**
- **文と文のメリハリの付け方**
- **人物・会話・対話の表現の仕方**

【第７章の構成】

～本章のねらい～

さまざまな文学作品の文体と語り口のちがいを表現すること

～本章の流れ～

本章のねらいである「文学作品の文体と語り口のちがい」を表現するためには次の３つを学ぶ必要がある

- **文学文と理論文とでは「読み方」がちがう**
- **作品の背景となる心情のちがいを学ぶ**
  - **背景感情**
  - **背景行為**
- **語り口の種類のちがいを知る**
  - **口調は５種類**
  - **語り口は 10 種類**

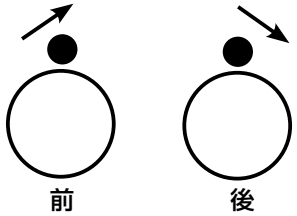
す。2音3音の区切りのアクセント原理は単純です。下図をご覧ください。

2音でも3音でもいずれか1カ所に強さアクセントがつきます。2音ならば前か後ろ、3音ならば前か中か後ろです。アクセントが後ろにつくときには原則として音が上がりません。からだが沈み込んだ発声になるからです。そして、2音の前、3音の前と中の音（おん）では、力が入るとともに音が上がります。

上体の落とし込みとからだの沈み込みとがアクセントの位置と一致したときに、リズミカルな発声になります。からだの動きとアクセントのタイミングがうまく合うようになるまで練習しましょう。

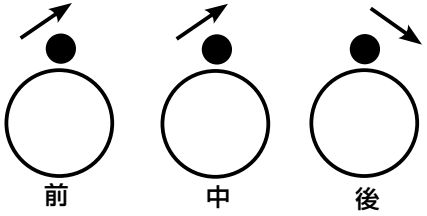
2音3音のアクセント原理

①2音の場合



2音ならば前か後ろのいずれかに強さアクセントが付く

②3音の場合



3音ならば前か、中か、後ろのいずれかに強さアクセントが付く

２音３音アクセントの応用

①単語だけを取り出した例

げきりゅう　　まけ

あい　　まこと　　いだい　　ちから

②単語（名詞や動詞など）をつなげた例

げきりゅうにも　まけぬ

あいとまことの　いだいな　ちからを

③２音３音のアクセント原理を応用した例

げき｜りゅう｜にも｜まけぬ｜

あいと｜まこ｜とのの｜いだ｜いな｜ちか｜らを｜

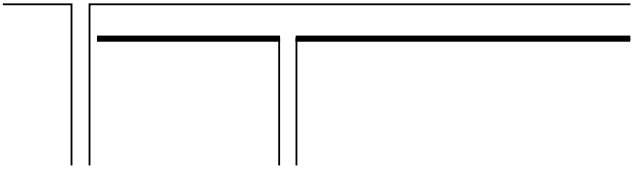
文分析の段階図

※第１段階から第３段階まで太い線の区切りで読んでください

第1段階 ▶

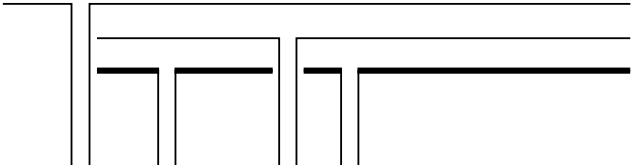
あるとき、三十匹の　あまがえるが、一緒に　面白く　仕事を　やっておりました。

第2段階 ▶



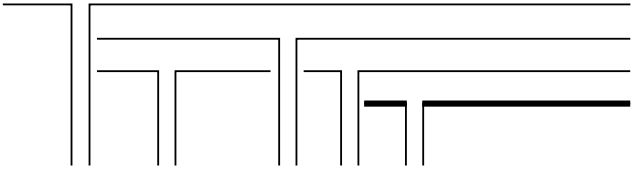
あるとき、三十匹の　あまがえるが、一緒に　面白く　仕事を　やっておりました。

第3段階 ▶



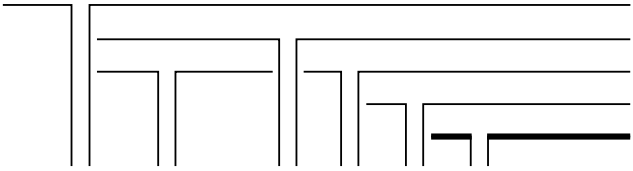
あるとき、三十匹の　あまがえるが、一緒に　面白く　仕事を　やっておりました。

第4段階 ▶



あるとき、三十匹の　あまがえるが、一緒に　面白く　仕事を　やっておりました。

第5段階 ▶



あるとき、三十匹の　あまがえるが、一緒に　面白く　仕事を　やっておりました。

まず、実際の記号づけを見ていただきましょう。次のページに掲載しました。志賀直哉「清兵衛と瓢箪」の冒頭の部分です。

ずいぶん複雑なものだと思われるかもしれません。しかし、安心してください。あとの解説を読めばひとつひとつの記号の意味がわかってきます。そして、自分でもこのような記号をつけて作品を読み解くことができるようになります。

朗読用の記号一覧

◎「記号づけ」の記号

（A）カッコ

① ○「○○○」○　カギ（言ったこと）
② ○（○○○）○　カッコ（考え・内言（ないげん））
③ ○〈○○○〉○　山カッコ（①観念・②長い名詞句）

（B）切れ目

④ ○○／○○○　区切り
⑤ ○○／○○○　間（ま）
⑥ ○○○∨○○　切りかえ（①飛びこえ・②まとめ）
⑦ ○○、○○　ツナギ

（C）アクセント・プロミネンス

⑧ ○○○○○•　アクセント（黒丸・ツナギ）
⑨ ○○○○○　プロミネンス（波　線）
⑩ ○○○○○　プロミネンス（二重線）

～「清兵衛と瓢箪」の記号づけの例～

これは清兵衛という子供と瓢箪との話である。この出来事以来清兵衛と瓢箪とは縁が断れてしまったが、間もなく清兵衛には瓢箪に代わる物が出来た。それは絵を描く事で、彼はかつて瓢箪に熱中したように今はそれに熱中している……

清兵衛が時々瓢箪を買って来る事は両親も知っていた。三、四銭から十五銭位までの皮つきの瓢箪を十ほども持っていたろう。彼はその口を切る事も種を出す事も独りで上手にやった。栓も自分で作った。最初茶渋で臭味をぬくと、それから父の飲みあました酒を貯えておいて、それで頻りに磨いていた。

全く清兵衛の凝りようは烈しかった。ある日彼はやはり瓢箪の事を考え考え浜通りを歩いていると、ふと、眼に入った物がある。彼ははッとした。それは路端に浜を背にしてズラリと並んだ屋台店の一つから飛び出して来た爺さんの禿頭であった。清兵衛はそれを瓢箪だと思ったのである。「立派な瓢じゃ」こう思いながら彼は暫く気がつかずにいた。――気がついて、さすがに自分で驚いた。その爺さんはいい色をした禿頭を振り立てて彼方の横町へ入って行った。清兵衛は急に可笑しくなって一人大きな声を出して笑った。堪らなくなって笑いながら彼は半町ほど馳けた。それでもまだ笑いは止まらなかった。

これほどの凝りようだったから、彼は町を歩いていれば骨董屋でも八百屋でも荒物屋でも駄菓子屋でもまた専門にそれを売る家でも、およそ瓢箪を下げた店といえば必ずその前に立って凝っと見た。

清兵衛は十二歳でまだ小学校に通っている。彼は学校から帰って来ると他の子供とも遊ばずに、一人よく町へ瓢箪を見に出かけた。そして、夜は茶の間の隅に胡坐をかいて瓢箪の手入れをしていた。手入れが済むと酒を入れて、手拭で巻いて、

永訣の朝

宮沢賢治

〈きょうのうちに
とおくへいってしまうわたくしのいもうとよ。
みぞれがふっておもてはへんにあかるいのだ。
（あめゆじゅとてちてけんじゃ）
〈うすあかくいっそう陰惨な雲から、
みぞれはびちょびちょふってくる。
（あめゆじゅとてちてけんじゃ）
（青い蓴菜のもようのついた
これらふたつのかけた陶碗に、
〈おまえがたべるあめゆきをとろうとして、
わたくしはまがったてっぽうだまのように、
〈このくらいみぞれのなかに飛びだした。

4 文学作品の表現よみ

人間のあらゆる行為は表現としての意味を持ちます。それが発展すると芸術と呼ばれるものになります。朗読も、ある段階まで来ると、声による表現になるのです。そうなると、朗読と呼ぶよりも「表現よみ」と呼びたくなります。そのような考えから、わたしは以前に『表現よみとは何か―朗読で楽しむ文学の世界』（1995　明治図書出版）という本を出版しました。朗読理論を基礎にして、声による文学作品の表現の可能性を考えたのです。

朗読が声による表現であるならば、さまざまな読み方が可能になるはずです。ところが、まだまだ多くの人たちが朗読を表現として楽しむところまで行っていないようです。それどころか、表現することに躊躇したり、遠慮したりしているようです。

「朗読ではどこまで表現してよいのか」とか、「朗読と演技とはちがうのか」というような質問をよく受けます。朗読では演技をしてはいけないと思っているようです。演技ならば自由にやれるのに、朗読

となると萎縮してしまう傾向があります。それは俳優による朗読に典型的に現われます。生き生きした演技のできる俳優が朗読をするときには、何かに遠慮しているような地味な朗読になってしまいます。

朗読されるのは文学作品です。そこには、作者や「語り手」や人物の思いが表現されています。作品に感情が表現されているのですから、声でも表現するのは当たり前です。そのためには、まず作品の文章を正確に読みとる必要があります。もしおかしな調子がついたり、違和感を感じるような朗読になるとしたら、文章の読み取り方やプロミネンスの付け方がまちがっているのです。

しかし、この本を読んできたあなたには、朗読の基本がひと通りおわかりだと思います。これから、あなたの好きな作品を選んで、記号づけで分析しながら呼んでいくことができます。記号づけができれば、作品を表現するという目標の8合目までは到達できます。あとの2割は、それぞれの人の個性による表現になります。

「記号づけにしたがったら個性がなくなるのではないか」と思う人がいるかもしれません。しかし、個性というものはそんな弱いものではありません。記号づけはあくまで記号です。大まかな基本を定めるものです。個々人の読み方をしばるものではありません。声による表現方法はさまざまです。たとえ記号どおりに読んでも、各人の読み方は決して同一にはなりません。そこに、朗読の表現のおもしろさがあるのです。

そもそも、わたしたちが話している言葉は自分のものではありません。これまでほかの人たちが使ってきた言葉を借りて自分の考えを語っているのです。ただし、声の響きはまちがいなく個性的なもので

す。例えば、母音の「アイウエオ」の発音も厳密にはひとりひとりみなちがいます。ことばの規準になる音韻としての共通性があるだけです。

記号づけのプロミネンスの波線の表現も二重線の表現も、ひとつの表現だけを示しているわけではありません。読み手の個性によって表現の仕方は変わります。個々人の身体的な条件がちがうのと同じです。声の質のちがい、声の高さのちがい、力の入れ方のちがいなどによって一つひとつの語句の表現が変わります。作品全体の表現となればなおさらのことです。さらに、上達すればするほど細かい部分で微妙な表現のちがいが出てきます。

「西遊記」の孫悟空のたとえ話をご存知でしょうか。お釈迦様のもとを飛び立って十万八千里を飛翔したという孫悟空が、じつはお釈迦様の手のひらの中から出られなかったという話です。まったく制限のない自由というものはあり得ません。朗読のための文法や記号づけというものは、だれもが守るべき基本です。そのワクの中で新たな表現を生み出すのが朗読における創造性なのです。

最後に、語り口の10通りの代表例となる作品の冒頭部分を記号づけをして紹介します。付録のCDにはわたしの読みの録音もありますので、記号を見ながらお聴きになってください。ただし、録音はあくまでわたしの表現です。マネをしてはいけません。マネをしようと思っても、マネができるのは表面にすぎません。朗読に上達するコツは、読み手自身が作品そのものの理解を深めることです。あなたの表現はあなたの理解と解釈から生まれます。

あらゆる表現と同じように、朗読は単なる技術ではありません。最終的には、読み手の人間そのものの表現になります。ですから、朗読に上達するためには、いろいろな小説を読んだり、よい芝居を見たり、よい音楽を聴いたりするとよいでしょう。人生におけるあらゆる体験が声の表現のための糧となるのです。

【CD録音作品一覧】

①回想風―「思い出」太宰治
②日記風―「クローディアスの日記」志賀直哉

094

③告白風―「濁った頭」志賀直哉
④手紙風―「Kの昇天」梶井基次郎

095

⑤昔話風―「蜘蛛の糸」芥川龍之介
⑥童話風―「オツベルと象」宮沢賢治

096

⑦講談風―「最後の一句」森鴎外
⑧落語風―「吾輩は猫である」夏目漱石

097

⑨芝居風―「藪の中」芥川龍之介
⑩演劇風―「駈込み訴え」太宰治

098

1　回想風―太宰治「思い出」

黄昏のころ私は叔母と並んで門口に立っていた。叔母は誰かをおんぶしているらしく、ねんねこを着て居た。その時の、ほのぐらい街路の静けさを私は忘れずにいる。叔母は、「てんしさまがお隠れになったのだ」と私に教えて、「生き神様」と言い添えた。「いきがみさま」と私も興深げに呟いたような気がする。それから、私は何か不敬なことを言ったらしい。叔母は、「そんなことを言うものでない、「お隠れになったと言え」と私をたしなめた。「どこへお隠れになったのだろう」と私は知っていながら、わざとそう尋ねて叔母を笑わせたのを思い出す。

2　日記風―志賀直哉「クローディアスの日記」

――日

彼は珍しいいい頭をした男である。理解力も豊かだし、それに詩人だ。自分は近い内に何もかも語り合って彼によき味方になって貰わねばならぬ。自分は総てを彼に打ち明けて関わない。然し今はその時でない。彼は今心の均衡を失っている。もつともそれは自分も同じ事だ。兄の死後その妻を直ぐ妻として自らその王位に直った、単にその生活の変化から云っても何となく自分は常と同じ調子では過ごせない。まして久しい恋――それにはほとんど望みを断っていた恋を得た喜びには自分の心の均衡を失わずにはいられない。

3　告白風―志賀直哉「濁った頭」

私も弱い人間です、もうこんな体になったら、そんな事は如何でもよさそうなものですが、それでもやはり自分を何かの意味でジャスティファイ仕ようと云う気はあります。このまま衰えて死ぬにしたところで、親類や友達や、殊に自家の者等の見ている私で終わって了うんじゃ、浮びきれません。

或時代、私も小説家になろうと思ったことがあって、二ツ三ツつまらぬ物を書いた事がありますから、自分の事も小説のように書いてみたいとは思うんです、然し駄目です。とてもそんな根気はありません。貴方のような方に聴いて戴けるというのが今は望み得る最上です。

4　手紙風―梶井基次郎「Kの昇天」

お手紙によりますと、あなたはK君の溺死に就て、それが過失だったろうか、自殺だったろうか、自殺ならば、それが何に原因しているのだろう。或は不治の病をはかなんで死んだのではなかろうかと様ざまに思い悩んでいられるようであります。そして僅か一と月程の間に、あの療養地のN海岸で偶然にも、K君と相識ったというような、一面識もない私にお手紙を下さるようになったのだと思います。私はあなたのお手紙ではじめてK君の彼地での溺死を知ったのです。私は大層おどろきました。と同時に「K君はとうとう月世界へ行った」と思ったのです。どうして私がそんな奇異なことを思ったか、それを私は今ここでお話しようと思っています。それは或はK君の死の謎を解く一つの鍵であるかも知れないと思うからです。

5　昔話風―芥川龍之介「蜘蛛の糸」

或日の事でございます。御釋迦様は極楽の蓮池のふちを、独りでぶらぶら御歩きになっていらっしゃいました。池の中に咲いている蓮の花は、みんな玉のようにまっ白で、そのまん中にある金色の蕊からは、何とも云えない好い匂が、絶間なくあたりへ溢れております。極楽は丁度朝なのでございましょう。

やがて御釋迦様はその池のふちに御佇みになって、水の面を蔽っている蓮の葉の間から、ふと下の容子を御覧になりました。この極楽の蓮池の下は、丁度地獄の底に当って居りますから、水晶のような水を透き徹して、三途の河や針の山の景色が、丁度覗き眼鏡を見るように、はっきりと見えるのでございます。

6　童話風―宮沢賢治「オツベルと象」

オツベルときたら大したもんだ。稲扱器械の六台も据えつけて、のんのんのんのんのんのんと、大そろしない音をたててやっている。

十六人の百姓どもが、顔をまるっきりまっ赤にして足で踏んで器械をまわし、小山のように積まれた稲を片っぱしから扱いて行く。藁はどんどんうしろの方へ投げられて、また新らしい山になる。そこらは、籾や藁から発ったこまかな塵で、変にぼうっと黄いろになり、まるで沙漠のけむりのようだ。

7　講談風―森鴎外「最後の一句」

元文三年十一月二十三日の事である。大阪で、「船乗業桂屋太郎兵衛と云うものを、木津川口で三日間曝した上、斬罪に処すると、高札に書いて立てられた。市中到る処太郎兵衛の噂ばかりしている中に、それを最も痛切に感ぜなくてはならぬ太郎兵衛の家族は、南組堀江橋際の家で、もう丸二年程、殆ど全く世間との交通を絶って暮しているのである。

8　落語風―夏目漱石「吾輩は猫である」

吾輩は猫である。名前はまだ無い。

どこで生れたかとんと見当がつかぬ。何でも薄暗いじめじめした所でニャーニャー泣いていた事だけは記憶している。吾輩はここで始めて人間というものを見た。しかもあとで聞くとそれは書生という人間中で一番獰悪な種族であったそうだ。この書生というのは時々我々を捕えて煮て食うという話である。

9　芝居風―芥川龍之介「藪の中」

あの男を殺したのはわたしです。しかし女は殺しはしません。「ではどこへ行ったのか？」それはわたしにもわからないのです。まあ、お待ちなさい。いくら拷問にかけられても、知らない事は申されますまい。その上わたしもこうなれば卑怯な隠し立てはしないつもりです。

「わたしは昨日の午少し過ぎ、あの夫婦に出会いました。その時風の吹いた拍子に、牟子の垂絹が上ったものですから、ちらりと女の顔が見えたのです。

10　演劇風―太宰治「駈込み訴え」

申し上げます。申し上げます。旦那さま。あの人は、酷い。酷い。はい。厭な奴です。悪い人です。ああ。我慢ならない。生かして置けねえ。

「はい、はい。落ちついて申し上げます。あの人を、生かして置いてはなりません。世の中の仇です。はい、何もかも、すっかり、全部、申し上げます。私は、あの人の居所を知っています。すぐに御案内申します。ずたずたに切りさいなんで、殺して下さい。」あの人は、私の師です。主です。けれども私と同じ年です。三十四であります。私は、あの人よりたった二月おそく生れただけなのです。たいした違いが無い筈だ。人と人との間に、そんなにひどい差別は無い筈だ。それなのに私はきょう迄あの人に、どれほど意地悪くこき使われて来たことか。どんなに嘲弄されて来たことか。ああ、もう、いやだ。

あとがき

今、最終仕上げが終わってほっとしています。1年がかりの仕事でした。最初の打ち合わせのときに、編集者から「30年は売れる本をつくりましょう」ということばをいただきました。今、本の全体を見回して、正直なところ、本当にそういう本になるだろうと思います。

わたしは、今から15年ほど前に『表現よみとは何か――朗読で味わう文学の世界』（1995　明治図書出版）という本を出版しました。そこでは、朗読の理論を基礎として文学作品を表現するための読み方について論じました。今回、わたしは、朗読検定のための「教科書」を書くというので、改めて朗読について根本から問い直す作業を始めました。いわば、音声表現の基礎を実践的にとらえ直す仕事でした。

その結果、この本はまさに「教科書」といわれるものに仕上がりました。あえていうならば、日本語の音声表現教育のための教科書ともいえるでしょう。朗読に限らず、小中学校の国語科の参考書としても画期的な本だと思います。例えば、文部科学省の小学校学習指導要領には、次のページのような項目が掲げられています。これらの項目に関する指導方法はすべてこの本のどこかに書かれています。

新学習指導要領・小学校国語（平成23年４月から実施）

◆第1学年および第2学年

○姿勢や口形、声の大きさや速さなどに注意して、はっきりした発音で話すこと。
○語のまとまりや言葉の響きなどに気を付けて音読すること。
○言葉には、事物の内容を表す働きや、経験したことを伝える働きがあることに気付くこと。
○音節と文字との関係や、アクセントによる語の意味の違いなどに気付くこと。
○言葉には、意味による語句のまとまりがあることに気付くこと。
○文の中における主語と述語との関係に注意すること。

◆第3学年および第4学年

○相手を見たり、言葉の抑揚や強弱、間の取り方などに注意したりして話すこと。
○内容の中心や場面の様子がよく分かるように音読すること。
○目的に応じて、中心となる語や文をとらえて段落相互の関係や事実と意見との関係を考え、文章を読むこと。
○場面の移り変わりに注意しながら、登場人物の性格や気持ちの変化、情景などについて、叙述を基に想像して読むこと。
○易しい文語調の短歌や俳句について、情景を思い浮かべたり、リズムを感じ取りながら音読や暗唱をしたりすること。
○長い間使われてきたことわざや慣用句、故事成語などの意味を知り、使うこと。
○言葉には、考えたことや思ったことを表す働きがあることに気付くこと。
○修飾と被修飾との関係など、文の構成について初歩的な理解をもつこと。
○指示語や接続語が文と文との意味のつながりに果たす役割を理解し、使うこと。

◆第5学年および第6学年

○目的や意図に応じて、事柄が明確に伝わるように話の構成を工夫しながら、場に応じた適切な言葉遣いで話すこと。
○自分の思いや考えが伝わるように音読や朗読をすること。
○親しみやすい古文や漢文、近代以降の文語調の文章について、内容の大体を知り、音読すること。
○文章の中での語句と語句との関係を理解すること。
○語感、言葉の使い方に対する感覚などについて関心をもつこと。
○文や文章にはいろいろな構成があることについて理解すること。

この本に書かれた実践の方法は、日本語を使う子どもたちのための音声言語能力を高めるためのものです。同時に、以前には子どもだったおとなにとっても、言語能力を養成するための方法として応用できるものがいろいろあります。中学生・高校生の読者を意識して書きましたが、おとなにとっても読み応えのある内容です。少なくとも、第5章までの内容を身につければ、一般社会人の話しコトバ能力としては十分なものになるはずです。

今、現代日本の言語生活において、特に貧しいのが音声言語です。「ことば」というと文字、文字というと「漢字」という発想は、わたしたちの言語能力を萎縮させるものです。もともと、ことばとは音声でした。それも個々人の身体行動としての音声のことばなのです。現代日本の若者たちのコミュニケーション能力の不足も、読書離れと言われる現象も、その本質は音声言語能力の欠如にあるとわたしは考えています。それは、人間としての発言における自信のなさ、生きる力への不安にまでつながるものです。

わたしは、この本が、子どもたちの言語能力の養成のためにも、おとなたちの言語能力を高めるためにも役に立ってほしいと思っています。そして、この本を教科書として行われる朗読検定が、今後、大きな発展をすることを祈っております。

この本を書くにあたって、多くの方がたにたいへんお世話になりました。それらの方がたのご協力なくして、この本は完成しなかったでしょう。ここに記して感謝のことばを捧げます。

表現よみオーの会の各メンバーは、この12年間、わたしとともに表現よみの共同研究をしてくださっています。日本朗読検定協会の稲葉英美子、佐藤久美子、葉月のりこ、原田里美、村山博之の各氏には、全体構想の段階で参考になる助言をいただきました。日本コトバの会の青木健二、下川浩、原嶋邦雄の各氏からは、言語理論と文法についての助言をいただきました。編集では、きりくの磯崎公亜氏、音声収録にブライトリーレコードの八木岡健二氏、企画原稿化、書籍デザインをはじめとした制作・出版にはパンローリング株式会社の岡田朗考氏、竹内吾郎氏に協力いただき、たいへんお世話になりました。

最後に、1年間にわたる執筆期間中にさまざまな面から支えてくれた妻の陽子に感謝を捧げます。

2012年1月11日

2011年3月11日、東日本大震災から10カ月目の日に

●参考にした文献（ほぼ著作年代順）

吉田 一穂「メカニズム」1930『吉田一穂全集Ⅱ』1983 小澤書店
日下部重太郎『朗読法精説』1932 中文館書店
神保 格『読本の朗読法』1940 晃文社
湯山 清『国語リズムの研究』1944 国語文化研究所
幸田 露伴「音幻論」1945『露伴随筆集（下）』1993 岩波書店
久保 栄『久保栄演技論講義』1976 三一書房
S・K・ランガー（池上保太/矢野萬里訳）『芸術とは何か』1967 岩波書店
メルロ=ポンティ（木田元ほか訳）『言語の現象学』2001 みすず書房
坂田午二郎『やさしい発音・発語指導』1973 日本特殊教育協会
野口三千三『原初生命体としての人間』1972 三笠書房
大久保忠利『楽しくわかる日本文法』1976 一光社
荒木 茂『表現よみ入門』1979 一光社
石田佐久馬『音読・朗読・黙読』1979 東京書籍
竹内 敏晴『話すということ（ドラマ）――朗読源論への試み』1981 国土社
大久保忠利・斎藤郁子編『表現よみと国語教育』1983 明治図書出版
近江 誠『オーラル・インタープリテーション入門』1984 大修館書店
日本放送協会編『NHKアナウンス・セミナー』1985 日本放送出版協会
石塚 雄康『いき・こえ・ことばのイメージ―日本語のための呼吸・発声・発音法』1992 青雲書房
下川 浩『現代日本語構文法―大久保文法の継承と発展』1993 三省堂
渡辺 知明『表現よみとは何か――朗読で楽しむ文学の世界』1995 明治図書出版
杉藤美代子『声にだして読もう！――朗読を科学する』1996 明治書院
NHK放送文化研究所編『NHK日本語発音アクセント辞典』1998 日本放送出版協会
NHKアナウンス・セミナー編集委員会編『新版NHKアナウンス・セミナー』2005 NHK出版
中村 明一『「密息」で身体が変わる』2006 新潮社
下川 浩『コトバの力・伝え合いの力』2009 えむ企画出版社
金田一春彦監修『新明解日本語アクセント辞典CD付き』2010 三省堂

ヒツジの声 60
必要成分 157,163
表現よみ 23,320,322
描写 245
腹式呼吸 46
腹式発声 46
副助詞 258
複文 238
フレーズ 125,127,130
プロミネンス 209,210,255,262,266,282
文 143,145,159,229,232,268
文学言語 295,298
文学作品 255,295,307,320
文型 156,232,235
文素 146
文体 310
文の骨組み 254
文分析 143,149,170,173,176,178
文法 139,143
文脈 262
母音 77,78

●マ行

マイク 42
無声音 69,74
目玉アクセント 125
黙読 30
物語 227,245,310

●ヤ行

良い朗読 308
読む 15

●ラ行

ラング 319
リズム 87,99,101
リラックス 35
理論言語 298
朗読 15,21,23,308,318
録音 308
論理 276

特典音声 記載ページ対応表

Track	対応ページ数
Track 1	48 P
Track 2	48 P
Track 3	49 P
Track 4	49 P
Track 5	53 P
Track 6	54 P
Track 7	55 P
Track 8	55 P
Track 9	56 P
Track 10	59 P
Track 11	59 P
Track 12	60 P
Track 13	61 P
Track 14	62 P
Track 15	62 P
Track 16	63 P
Track 17	64 P
Track 18	64 P
Track 19	66 P
Track 20	67 P
Track 21	68 P
Track 22	70 P
Track 23	71 P
Track 24	72 P
Track 25	72 P
Track 26	73 P
Track 27	74 P
Track 28	75 P
Track 29	78 P
Track 30	91 P
Track 31	93 P
Track 32	93 P
Track 33	94 P
Track 34	95 P
Track 35	97 P
Track 36	98 P
Track 37	103 P
Track 38	104 P
Track 39	105 P
Track 40	105 P
Track 41	106 P
Track 42	107 P
Track 43	108 P
Track 44	113 P
Track 45	114 P
Track 46	115 P
Track 47	115 P
Track 48	117 P
Track 49	118 P

Track	対応ページ数
Track 50	119 P
Track 51	119 P
Track 52	120 P
Track 53	121 P
Track 54	121 P
Track 55	122 P
Track 56	122 P
Track 57	128 P
Track 58	128 P
Track 59	129 P
Track 60	129 P
Track 61	129 P
Track 62	130 P
Track 63	131 P
Track 64	131 P
Track 65	131 P
Track 66	161 P
Track 67	161 P
Track 68	162 P
Track 69	163 P
Track 70	165 P
Track 71	166 P
Track 72	166 P
Track 73	167 P
Track 74	167 P
Track 75	248 P
Track 76	249 P
Track 77	251 P
Track 78	252 P
Track 79	257 P
Track 80	257 P
Track 81	259 P
Track 82	260 P
Track 83	261 P
Track 84	263 P
Track 85	271 P
Track 86	271 P
Track 87	274 P
Track 88	275 P
Track 89	276 P
Track 90	280 P
Track 91	284 P
Track 92	303 P
Track 93	305 P
Track 94	325 P
Track 95	326 P
Track 96	327 P
Track 97	328 P
Track 98	329 P

【索引】

●ア行

アクセント 89,90,92,94,100,113
息 43,48
イヌの声 61
イメージ 295
イントネーション 87,153,158,159
ウラ声 61,65,267
売り声 68
オーラル・インタープリテーション 191
音楽 309
音声合成 142
音読 15,23

●カ行

解釈 264
会話 198,281
語り口 310,312,314
語り手 277,282,312
滑舌 69,75
カラスの声 62
からだ 33
聞く 15
記号づけ 187,196,210,212,321
記号づけの記号 192,194
「カギ」 199
「カッコ」 200
「山カッコ」 201
「区切り」 203
「間」204
「切りかえ」 205
「ツナギ」 206
「アクセント」 208
「波線」 209
「二重線」 210
共通語 89
くさび形 247,250
口のかまえ 76
言語 29
口頭解釈 190
声 40,50
腰 35
腰かけた姿勢 36
語順 260
コソアドことば 262
コトバの網 319
ことわざ 107,115,129

●サ行

作者 277
作品の選び方 307
詩 212
地声 58,65,267
指示語 262
姿勢 33,36,38
舌 69
地の文 198,281
修飾語 247,251
自由成分 157,165
修体文素 158,254
重複文 240
重文 236
修用文素 158,254
主要成分 156,159
小説 227,310
人物 277,284
声帯原音 52
成分・要素一覧表 147
接続語 272
説明 250

●タ行

ダイ・ドドナ・ドドナ 20,257,303,305
対話 282,284
高さアクセント 90,94,101
立った姿勢 38
単位文 229,236
短歌 106,114
段落 270
追体験 310
強さアクセント 92,94,96,99
テーマ・レーマ展開 169
登場人物 277
倒置文 261

●ナ行

内言 279
２音３音 57,101,110,112,116,123
ノド 51
ノド声 67

●ハ行

俳句 104,114
背景感情 300,302
背景行為 300,304
発声 46,57
鼻声 66
早口ことば 69,75
パロール 319
鼻濁音 66

■著者プロフィール　渡辺知明（わたなべ・ともあき）

1952 年、群馬県桐生市に生まれる。法政大学卒業後、日本コトバの会に入会。大久保忠利氏より言語理論、国語教育理論、表現よみ理論などを学ぶ。現在、コトバ表現研究所所長、日本コトバの会講師･事務局長、表現よみオーの会代表、日本朗読検定協会副理事長。

著書＝『放し飼いの子育て―やる気と自立の教育論』(1994 一光社)、『表現よみとは何か―朗読で楽しむ文学の世界』(1995 明治図書出版)

編著書＝日本コトバの会編『コトバ学習事典』(1988 一光社)、『大久保忠利著作選集・第 3 巻 生きたコトバⅠ―話し・聞き』(1992 三省堂)、『大久保忠利著作選集・第 4 巻 生きたコトバⅡ―読み・書き』(1992 三省堂)

2012年３月２日　初版第１刷発行

朗読（ろうどく）の教科書（きょうかしょ）

著　者　渡辺知明
発行者　後藤康徳
発行所　パンローリング株式会社
〒 160-0023　東京都新宿区西新宿 7-9-18-6F
TEL 03-5386-7391　FAX 03-5386-7393
http://www.panrolling.com/
E-mail　info@panrolling.com
装　丁　パンローリング装丁室
組　版　パンローリング制作室
印刷･製本　株式会社シナノ

ISBN978-4-7759-2462-4
落丁・乱丁本はお取り替えします。
また、本書の全部、または一部を複写・複製・転訳載、および磁気・光記録媒体に
入力することなどは、著作権法上の例外を除き禁じられています。

本文　©Tomoaki Watanabe 2012 Printed in Japan

9784775924624

ISBN978-4-7759-2462-4

C1081 ¥2100E

1921081021007

定価 本体2,100円+税

Pan Rolling